

「平成29年度 あおもり街かど探偵団 ～諏訪神社と堤橋周辺～」報告書

滝本 敦¹⁾

A report on "2017 the detective team at the street corner in Aomori
～ Suwa shrine and the surrounding area of Tsutsumi Bridge ～"

Atsushi TAKIMOTO

Key words : 堤川、栄町、茶屋町、堤町、諏訪神社、文芸のこみち

1. はじめに

青森市は藩政期の本格的な町づくり以降、度重なる災害や戦災に見舞われ、特に、明治43(1910)年5月3日の大火は市内総1万716戸のうち、全焼戸数は5232戸の惨事であった。また、昭和20(1945)年7月28日の大空襲では市街地の88%を焼失、焼失家屋1万5125戸という大きな被害を受けている。そのため、今現在実際に目で見ることが出来る戦前の歴史的建造物は数少ない状態であるが、文献史料や古い地図、写真などを基に昔の街並みに触れることは可能である。

青森県立郷土館では平成21(2009)年から、青森市中心街の昔の街並みや美術作品、交通・港の歴史、合浦公園などを巡る街歩き企画「あおもり街かど探偵団」を実施している。今年度は今までの中心街を中心としたコースとは異なり、藩政期には町域の東端に位置する一方で交通の要所としての性格をもち、近代以降は早くから市街地化されて賑わいをみせた、堤橋周辺の栄町や茶屋町、堤町を巡るコースで実施した。ここでは、その内容をもとに実施コース地域の歴史などについて編集し、報告する。

2. 開催日時・コース

(1) 開催日時 : 平成29年9月30日(土) 午前10時から午前11時30分

(2) テーマ : 「諏訪神社と堤橋周辺」

(3) コースの概要 : 諏訪神社 → 松木満史アトリエ跡 → 松園橋 → 文芸のこみち → 郡場寛生家跡 → 栄町界限 → 茶屋町界限 → 茶屋町延命地藏尊 → 旭橋 → 堤町界限 → リンクステーションホール青森(青森市文化会館)

3. コースの解説

(1) 諏訪神社

御祭神は武御名方神、猿田彦神。平安時代中期に、もとの造道村浪打の地(合浦の稲荷神社の隣)に鎮座。その後寛永8(1631)年、青森の開港・町づくりを指揮した森山弥七郎により、開港・航海安全の守護神として堤川の中洲(現在の青柳橋下流あたりの位置)に移された。以来、元禄年間(1688～1704)まで青森五社の筆頭として崇められ、弘前藩主もたびたび参拝している。

明治5(1872)年の大火により、御神体以外を焼失。その後再建の際に現在の栄町一丁目の地に移ったが、昭和20(1945)年7月28日の大空襲により、再び社殿などのほぼ全てを焼失した。昭和24(1949)年、進駐軍の接收を受けていた合浦公園の招魂堂を移して新たな拝殿とし、その後、他の建物を建立して現在にいたる。

(2) 堤川

15世紀末ごろ、駒込川と荒川の合流点近く(現在の松原地区)にあった堤ノ浦城に、津軽郡代として南部光康(別名堤弾正左衛門)が入城したとされ、また、天文年間(1532～55)の津軽の地名をまとめた「津軽郡中名字」には包宿という地名がみられる。堤ノ浦の「浦」の字は港、包宿の「宿」の字は都市的な場所という意味があり、これらのことから、15～16世紀にはすでに堤川河口付近に港町があったと考えられる。この南部光康の一族はやがて横内城に移ったとされ、水害を防ぐために現在の善知鳥神社付近にあった「安潟」という大きな沼に流れ込んでいた荒川の川筋を変えて、駒込川と合流させたものが堤川であるとする伝承がある。

堤川は、古くから人々の生活や産業と密接につながっており、川べりでの洗濯、釣り、写生、子どもの遊びの他、近くの牧場の乳牛の放し飼いに利用された。また、道路整備・宅地造成などに利用する砂利の採取・運搬が舟で行われ、海産物の集積場となった河口付近は漁船がひしめき合い、川沿いには水産加工の工場も建設された。一方、堤川はたびたび氾濫し、橋も何度も流出するなど、周辺地域の人々の生活をおびやかした。(写真2)は昭和33(1958)年9月、堤川の氾濫により諏訪神社やその前の道路が冠水した様子を国道4号側から撮影したものである。道路沿いに並ぶ長屋の2階から外の様子をうかがう住人や、奥に見える旧東北本線の堤川鉄橋を歩いて渡ろうとする人々が写っている。

1) 青森県立郷土館 研究主査(〒030-0802 青森市本町二丁目8-14)



写真1 大正末期の堤川（北側より）（絵葉書）。中央に砂利を運搬する舟がみえる。奥に見えるのは堤橋



写真2 昭和33（1958）年の水害（浜中達男氏撮影）

(3) 堤橋

堤橋が最初に架けられたのは寛文11（1671）年で、場所は今よりも下流であった（現在のうとう橋付近、当時の町割りでは博労町、松森町の間から対岸の茶屋町延命地藏尊付近）。その後水害や火災などにより、喪失・架け替えを繰り返している。堤橋から、その北に位置する旭橋にかけての地域は、近世には奥州街道と大豆坂街道が結びつく地点であり、賑わいをうみだした。

明治5（1872）年の火災での焼失後、明治7（1874）年に豪華な姿の木造橋として現在の場所に架け替えられ、昭和9（1934）年には、鉄筋コンクリート製の橋に生まれ変わっている。戦後、交通量の増加に対応するため、昭和30（1955）年までに上流側・下流側それぞれに歩行者専用の橋が追加され、珍しい三重橋の姿となった。昭和40（1965）年から車道と歩道の間の部分を埋め合わせて車道を拡張し、その後、堤川の改修に伴う工事により、昭和59（1984）年に現在の姿となった（橋長64.2m、幅32.0m）。

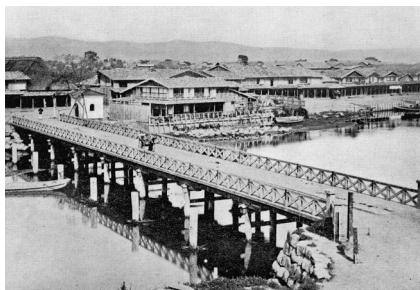


写真3 明治初期の木造の堤橋（絵葉書）

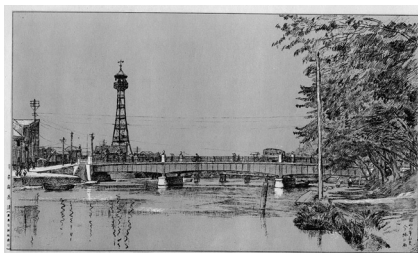


図1 昭和9（1934）年の様子 鉄筋コンクリート製の堤橋（今純三 作）

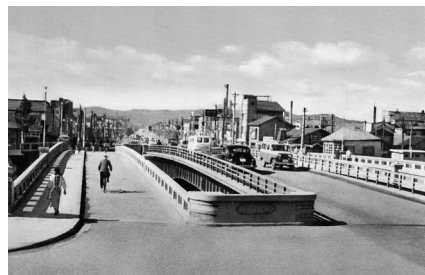


写真4 昭和30年代の三重橋の堤橋（絵葉書）

(4) 松木満史アトリエ跡

松木は旧木造町出身で、大正から昭和中期にかけて活躍した洋画家である。青森市の仏師のもとで木彫を学ぶなかで、油絵に関心を持ち、棟方志功ら同世代の若者たちと切磋琢磨しながら芸術の道を歩んだ。特に、フランスへ渡って本場の美術に触れたことで鮮やかな色彩感覚を手に入れたとされ、帰国後は洋画の第一人者として青森県的美術界を牽引した。

松木は昭和22（1947）年、東京から単身で青森に戻り、堤橋近くの堤川東岸の川沿いに小さなバラック小屋のアトリエを建てて、創作活動にいそしんだ。ここには多くの画家などが集ったとされ、松木と親交があった棟方志功も、堤川の川べりに降りて、付近の風景を描写している。

なお、アトリエ跡の南東に位置する成田山青森寺の本尊である不動明王像は、松木満史・棟方志功・鷹山宇一らと交流のあったむつ市出身の彫刻家、古藤正雄の作である。

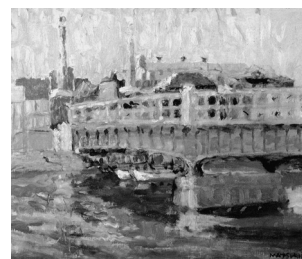
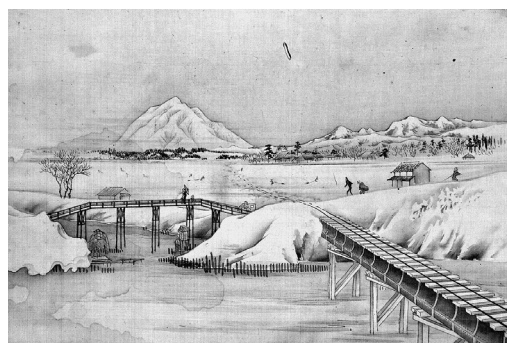


図2 堤橋（松木満史 作）

(5) 松園橋

旧東北本線が通っていた鉄橋跡。国鉄が東北本線の複線電化を進め、昭和43（1968）年に現在の新東北本線が開通。線路の変更で鉄橋も役目を終え、今は歩行者・自転車用の松園橋となっている。なお、新東北本線開通とともに浪打駅と浦町駅が廃止となり、かわりに小柳駅と東青森駅が新設された。

図3 川口月村筆『日本鉄道陸奥地方画譜』の第49図「青森県下堤川鉄橋ヨリ岩城山ヲ望ム」明治24（1891）年の鉄道開業頃の堤川鉄橋が描かれている



(6) 文芸のこみち

平成6（1994）年、青森市文化団体協議会などが中心となり、第30回青森市民文化祭記念事業として旧東北本線跡地の遊歩道の有効利用のために整備された。第1期（平成6年）、第2期（平成7年）、第3期（平成18年）にわたり、青森にゆかりの深い著名な先人17名の作品の一部や詩歌が刻まれた16の文学碑が設置された（夫婦である川崎むつをと原三千代の2人の碑文は1つの碑に刻まれている）。



写真5 文芸のこみち入口の石碑

表1 文芸のこみちに設置された文学碑一覧²⁾

人物名 生没年	碑文
郡場 寛 明治15 (1882) 年 ~ 昭和32 (1957) 年	「 大空に烟と昇り雨と降り 又も草木や 人に入るらむ 」
松木 満史 明治39 (1906) 年 ~ 昭和46 (1971) 年	「 大工さんとは 名は良いけれど しんの心はまがりかね 」
大道寺 繁禎 弘化元 (1844) 年 ~ 大正8 (1919) 年	「 花園に眠る胡蝶の我なれや ゆめと計りに春をくらしつ 」
太宰 治 明治42 (1909) 年 ~ 昭和23 (1948) 年	「 さらば 読者よ 命あらば また他日 元気で行こう 絶望するな では 失敬 『津軽』より 」
浅田 祇年 文政5 (1822) 年 ~ 明治39 (1906) 年	「 七十八という年冬の半より日もなうなうしき春のすゑにいたり、病の床に伏して 帰らぬ旅におもむかむとせしもつねぞまつはりを厚うする者から達の加護によりて 蘇りたれば 一句をものして、いきゝかその恩に謝す 雪と寝て 花に起きたる まくらかな 七十九翁 祇年 」
福島 常作 大正4 (1915) 年 ~ 平成18 (2006) 年	「 堤川の 中州に在りたりし 諏訪明神 宵宮の灯の 耀ふが蹟つ 」
淡谷 のり子 明治40 (1907) 年 ~ 平成11 (1999) 年	「 ひとすじの道 生きて来て あかあかと いのちのはてに 燃ゆる夕やけ 」
北畠 八穂 明治36 (1903) 年 ~ 昭和57 (1982) 年	「 夢を見ると 必ず青森の町なみを 歩いています 『津軽野の雪』より 」
川崎 むつを 明治39 (1906) 年 ~ 平成17 (2005) 年	「 はてしない海に 又もや日が落ちる 舵夫 (クォーターマスター) よ 何かもの言へ 『川崎むつを歌集 出帆旗』より 」
原 三千代 大正2 (1913) 年 ~ 平成21 (2009) 年	「 のこったことばのかずかずは だれのために唄おう 枯葉だけの林にひとり停つ 」
棟方 志功 明治36 (1903) 年 ~ 昭和50 (1975) 年	「 合浦浜 松原添えの砂丘に ふるさとのはな 玫瑰 (ハマナス) の花 」
西谷 みさを 明治36 (1903) 年 ~ 平成6 (1994) 年	「 たゆたうて やがて花びら 又流れ 」
菊谷 栄 明治35 (1902) 年 ~ 昭和12 (1937) 年	「 僕は敵弾に斃れる 最後の時まで レヴュー人としてもものを見るでしょう 『戦地からの便り』より 」
寺山 修司 昭和10 (1935) 年 ~ 昭和58 (1983) 年	「 大工町寺町米町仏町 老母買ふ町 あらずや つばめよ 」
田崎 潤 大正12 (1923) 年 ~ 昭和60 (1985) 年	「 悔いなし役者人生 一生懸命頑張っています 私の役が終るまで 『ズウズウ弁の初舞台』より 」
高木 恭造 明治36 (1913) 年 ~ 昭和62 (1987) 年	「 理髪屋 (ジャンボヤ) の 横町 (ヨゴチョ) バマがだら 鯨 (ニス) 焼ぐ匂 (カマリ) ァしてだ 方言詩集『まるめる』春より 」
三ッ谷 平治 大正6 (1917) 年 ~ 平成13 (2001) 年	「 今日の雪 サラサラ乾きて 頬に触れ すきまのやうに 雲切れて青 」

(7) 栄町

もと造道村の一部で一帯が野原だったが、弘前藩の士族が明治3（1870）年ころから移り住み、また、諏訪神社が明治5（1872）年の大火以後に堤町から現在地に移転したことで、町の形態が出来上がった。茶屋町に対して、その裏通りに新たにできた町のため、一時期、新茶屋町とも呼ばれた。その後、明治9（1876）年に新道（現在の国道）が整備されて以降、栄町の方が本通りとなり、また、青森県師範学校、青森県立青森中学校、商業学校などが移転してきたことなどから、人々の往来が増加した。

(8) 郡場寛生家跡

現在の国道4号沿いに生家跡がある。郡場は植物生理学の研究者として世界で著名な植物学者・理学博士。造道村浪打新町（現在の青森市栄町）で生まれ、東京帝国大学（現 東京大学）理科大学植物学科等へ進学。その後理学博士となり、東京帝国大学や理科大学などにおいて、植物生理学などを教授した。

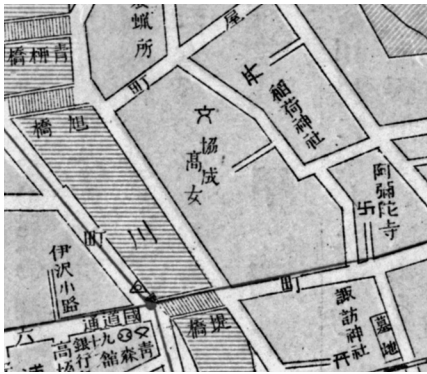
昭和17（1942）年に教壇を降りた後、終戦時まで昭南特別市（現在のシンガポール）の昭南植物園の園長に就任。日本軍の捕虜となったイギリス人の元園長などと協力し、園を破壊から守ったことが英国誌ネーチャーで紹介されるなど、その研究活動に対する姿勢は後世まで語り継がれている。

終戦後、弘前大学学長となり、農学部創設などに尽力したが、学長在任中に他界。



写真6 生家跡の「ゆかりの地由来文」

(9) 茶屋町



かつて堤川以東の一帯は造道村浪打と呼ばれており、茶屋町は造道の枝村であった。この地域は奥州街道が堤川を渡る地点にあたるため、人の往来が多くにぎわいがあり、茶屋が並んでいたことが町名の由来である。のちに南側に栄町が発展すると、茶屋町は古茶屋町、栄町は新茶屋町と呼ばれることもあった。

大正14（1925）年には、現在の国道4号沿いの阿彌陀寺北西側に、のちの私立青森明の星高等学校につながる私立協成高等女学校が開校。また、戦後、ねぶた祭りの際のねぶたの解散地点に近かったため、堤川沿いの茶屋町や堤町では祭り後の休憩を取る跳人などの姿や出店が多く見られた。

図4 昭和3（1928）年〔青森市街地図〕

(10) 茶屋町延命地藏尊

文禄年間（1592～96）に横内城主の堤弾正左衛門が、堤川改修を行った際の犠牲者を現在の妙見のあたりで祀ったものが始まりとされる。その後洪水で流された際、下流の茶屋町の人々が引き上げて祀り始めた。戦前は旭橋たもとの川岸にあったが、その後何度か場所が変わり、昭和44（1969）年の台風9号の水害後に行われた川の拡幅工事に伴って現在地に移動した。

地藏堂は天保年間末（1840年代）建立以降、幾度も大火を免れ、特に明治43（1910）年の大火を免れた際には、慰問のために青森を訪れた天皇勅使から称賛されている。また、昭和20（1945）年の大空襲の際に逃げ遅れた住民40名ほどが旭橋の下に避難したところ、地藏堂の炎上で火の向きが変わり、住民は助かったという。人々の感謝の意により、いち早く昭和21（1946）年には再建された。地藏の像は空襲で焼けてしまったが、文禄4（1595）年の銘がある台座は現存している。



写真7 茶屋町延命地藏尊

(11) 旭橋

戦前の旭橋は木造で欄干に擬宝珠が付けられ、京都の五条大橋のような姿であった。旭橋北東地域の造道村浪打の柳原（現在の港町1丁目）には、かつて東北で1、2を争う規模・華やかさを誇る遊郭が存在した。この遊郭は、もとは堤川対岸の塩町（現在の青柳2丁目付近）にあったが、明治22（1889）年の火災で焼失したことで柳原に移転している。その後さらに明治43（1910）年の大火で全焼したため、遊郭の貸座敷は県外の函館や青森市南西部の旭町の地に移った。

また、同じく旭橋東岸地域には明治30（1897）年に県内初の電燈会社である青森電燈会社が開業しており、現在はその社屋跡地に記念碑と街灯のモニュメントが設置されている。



写真8 青森電燈会社跡記念碑と街灯モニュメント

(12) 堤町

藩政期以前より包宿という名称で町は存在したとされるが、寛文11（1671）年に堤川端町（現在の堤町）として成立した。奥州街道などの荷馬車が集まる場所として栄え、また、南方・弘前方面から中心地へ出てくる際の道路の結節点でもあり、第5連隊の兵士などが買い物をする場所でもあったため、近代以降も賑わいを見せた。

戦後も中心街の東側の出入り口、青森市東部地域の人々の生活拠点となり、終戦直後は闇市や露店街が存在した。また、戦前から営業を続けてきた大観堂やボクのおモチヤ、明治からの老舗であるそば屋の小田九・平田屋、映画館のオデオン座・国際劇場、飲み屋など、多くの人が集まる場として栄えた。昭和40年代にはアーケードも設置されて、利便性が高まった一方で、市内の他の商業地域や交通の発展に伴って買い物客が離れ、閉店する店もみられるなど、町の状況も変化してきている。

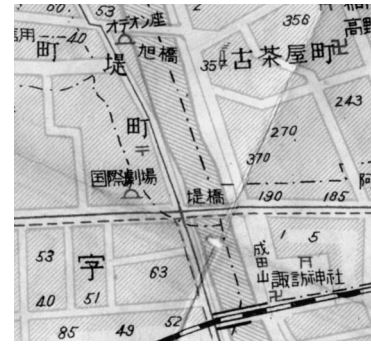


図5 昭和26（1951）年〔青森市街図〕
オデオン座・国際劇場が見える

(13) リンクステーションホール青森（青森市文化会館）・青森中央郵便局付近

この地域一帯は明治末期以降、文教地区として発展し、学校が建ち並んだ。かつてのこの地域の学校の変遷は以下の通りである（表2）。なお、表中の記号 ●・■・▲・◆・★ は、学校の統合・変遷・名称変更の状況をわかりやすくするために便宜的に附したものである。同じ記号のものが、つながりのあることを示している。

表2 リンクステーションホール青森（青森市文化会館）・青森中央郵便局付近 学校沿革³⁾

年代	内容
明治41 1908	●青森県立第三高等女学校開校（場所：現在の文化会館の地）
明治42 1909	●青森県立第三高等女学校を青森県立青森高等女学校に改称
明治44 1911	■青森県女子師範学校開校（場所：現在の文化会館の地。青森県立青森高等女学校と併置）
大正3 1914	▲青森県女子師範学校附属小学校開校、附属幼稚園開園（場所：現在の青森中央郵便局の地）
昭和18 1943	●青森県立青森高等女学校と ■青森県女子師範学校を分離 → 女子師範学校は青森県師範学校と合併のうえ、青森師範学校に改称
昭和20 1945	* 大空襲により複数の学校が焼失 ●青森県立青森高等女学校の生徒 → 造道国民学校に収容 * その後、青森県立青森高等女学校は旧5連隊兵舎の地に移転（◆青森県立青森中学校も同時に移転）
昭和22 1947	★青森市立野脇中学校開校（場所：現在の中央市民センターの地） ●青森県立青森高等女学校全焼（旧5連隊兵舎）
昭和23 1948	* 新制高等学校発足 ◆青森県立青森高等学校発足（旧 青森県立青森中学校より） ●青森県立青森女子高等学校発足（旧 青森県立青森高等女学校より）。新校舎（浪打）に移転
昭和24 1949	★青森市立野脇中学校新校舎移転（場所：現在の文化会館の地）
昭和25 1950	◆青森県立青森高等学校と ●青森県立青森女子高等学校が統合（校舎は筒井校舎と浪打校舎に分かれる）
昭和26 1951	●青森県立青森高等学校浪打校舎、3月末までに筒井校舎に合併
昭和45 1970	★青森市立南中学校開校（野脇中学校・第一中学校両校統合）。昭和47（1972）年に現在地に移転
昭和57 1982	青森市文化会館開館



図6 昭和4（1927）年〔青森市街全図〕

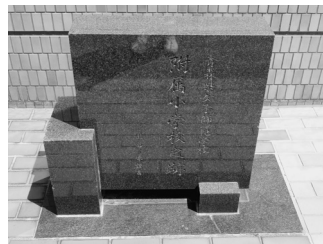


写真9 青森県女子師範学校附属小学校
跡記念碑（青森中央郵便局西側）



写真10 青森県女子師範学校・青森県立
青森高等女学校跡記念碑（リンク
ステーションホール青森正面）



写真11 裏面に「昭和貳年貳月四日撮影 航空写真 青森市一部」のメモ書きがある写真（*昭和2年=1927年）。写真中央に見える複数の棟からなる大きな建物は、当時の青森県立青森高等女学校と、それとともに併置された青森県女子師範学校（現在のリンクステーションホール青森（青森市文化会館）の地）。道路を挟んでその右隣の敷地に見える建物群は青森県女子師範学校附属小学校、同附属幼稚園（現在の青森中央郵便局周辺の地）

4. おわりに

今回、堤橋周辺地域を巡るコースを設定したのは、過去の参加者アンケートでこの地域を探索したいという声が多かったことが理由の一つである。実際に当日は、解説や参加者の方からの思い出話に熱心に聞きいってくださるなど、関心の高さがうかがえた。また、「中心街とは違い、あまり触れられることのない地域をめぐることができ、有意義な時間を過ごせた」などの感想もいただき、ある程度満足していただけたのではないかと思う。

実施にあたって様々な資料を確認するなかで、あらためてこの地域が青森市の歴史・発展に大きな意味を持つ地域であることが分かった。ただ、何度も災害や戦災に見舞われた影響で古くからの建物や街並みがほとんど残っていないことが残念である。今後は地図や写真とともに、少しでも過去の街並みを知ることができる建築物や遺構がないか調べてみたい。

5. 謝辞

諏訪神社の由来などについて説明をしてくださった諏訪神社宮司の柿崎信也氏、および、コース設定や訪問場所に関する多くの助言をいただいた当館主任学芸主査の佐藤良宣氏に厚くお礼申し上げる。

《注》

- 2) 鈴木廣、1997年、「青森県文学碑散歩」【青森市「文芸のこみち」(p.64~97)、随筆(p.364~367)】、財団法人青森県教育厚生会 などをもとに作成
- 3) 青森市史編集委員会、2000年、「新青森市史 別編教育(別巻) 年表・学校沿革」【年表、学校沿革(小学校・中学校・高等学校)】、青森市をもとに作成

(参考文献)

- ・ 肴倉彌八、1953年、「青森市町内盛衰記」【堤町の巻(p.104~116)、榮町の巻(p.116~124)、古茶屋町の巻(p.125~129)】、青森市町内盛衰記刊行会
- ・ 青森市役所、1982年、「青森市史 第6巻 政治編」【第8章 都市計画(p.620~724)、第12章 消防(p.897~982)】、図書刊行会
- ・ 青森市役所、1982年、「青森市史 第10巻 社寺編」【第3章 第2節 浄土宗(p.385~429)】、図書刊行会
- ・ 青森県立郷土館、1985年、「青森県「歴史の道」調査報告書 奥州街道(1)」【奥州街道の沿革(p.1~28)】、青森県教育委員会
- ・ 青森市、1993年、「青森市旧町名・ゆかりの地表示事業計画書」【VII ゆかりの地由来文等(p.32~70)】
- ・ 鈴木廣、1997年、「青森県文学碑散歩」【青森市「文芸のこみち」(p.64~97)、随筆(p.364~367)】、財団法人青森県教育厚生会
- ・ 青森市史編集委員会、2000年、「新青森市史 別編教育(別巻) 年表・学校沿革」【年表、学校沿革】、青森市
- ・ 柿崎信也、2004年、「御鎮座一千年記念神社誌 諏訪神社」【御祭神、由緒・沿革】、諏訪神社
- ・ 青森市史編集委員会、2005年、「新青森市史 資料編2 古代・中世」【中世 第IV部 城館資料編(p.586~665)】、青森市
- ・ 瀧本壽史監修、2007年、「図説 青森・東津軽の歴史」、郷土出版社
- ・ 青森市史編集委員会、2008年、「新青森市史 別編3 民俗」【第5章 第1節 マチの社堂(p.384~389)】、青森市
- ・ 中園裕監修、2010年、「保存版 青森・東津軽今昔写真帖」、郷土出版社
- ・ 青森市史編集委員会、2012年、「新青森市史 通史編第2巻 近世」、青森市
- ・ 青森市史編集委員会、2014年、「新青森市史 通史編第3巻 近代」、青森市
- ・ 青森市史編集委員会、2014年、「新青森市史 通史編第4巻 現代」、青森市
- ・ 2015年、「写真アルバム 青森・東津軽の昭和」、いき出版